

丹波市内の木工所など4社が実行委員会(能口秀一委員長)を組織し、「たんばウッドプロダクトデザインコンペ」を計画。丹波市産の木材を使った商品開発のアイデアを募っている。優秀なアイデアは実行委員会が買い取り、間伐材や里山の保全活動から得た木材を使用して商品化し、森林整備につなげる。

実行委員は、上畑裕之さん(上畑木工、春日町下三井庄)、細見靖さん(細見木芸、同町上三井庄)、近藤忠彦さん(三井庄木工、同)、能口委員長(ウッズ、氷上町賀茂)。

大賞に30万円

市内木工所ら実行委

“実用的で量産できる”

募集しているのは、1点ものの“作品”とは違い、量産できて、実用性があり、流通できる商品アイデア。企画書(A3判のPDF)を提出してもらう。大賞(1点)には副賞として30万円が贈られる。企画書を添付し、2月10日までにメールで同実行委員会事務局(ウッズ内、twoodpdc@wudz.ws、電0795・88・9635)へ。

同コンペは、丹波市の「丹波産木材商品の開発・販路開拓業務」を受託して実施。来年度以降は、実行委員会が継続する。

木材使った商品アイデア募集

これからの森林のあり方について語り合う炭焼き職人の田沼さん(右)と、木材コーディネーターの能口さん=幸世交流施設で



「災害備え炭の備蓄を」

豊岡・炭焼き職人が講演

豊岡市の炭焼き職人で、「神鍋白炭工房」代表の田沼光詞さん(45)の講演会が21日、幸世交流施設で行われた。田沼さんは、炭には床下の湿度を調整したり、水を浄化、臭いを軽減するなどの効果があることを説明したうえで、「災害時の備蓄資材として、公共施設に配置してはどうか」と提案した。

NPO法人サウンドウツズが開く「木材コーディネーター養成講座」の1つで、講座生のほか、一般にも参加を呼びかけ、計約30人が聴講した。

田沼さんは、炭の効果として、「災害が起き、電気が使えなくなった時は炭を燃やせば暖をとることもでき、飲料水を浄化することもできる。床上下浸水時には乾燥材としても使えるし、嫌な臭いも軽減してくれる」と、炭の備蓄の有効性を強調した。

このほか、炭を焼くことが里山整備につながり、「森林の保水力の向上、森林崩壊の予防、獣害の減少、さらには炭素を固定化することにもなり、温暖化ガスを削減する」などと説明。「海外では木を切り過ぎて砂漠化したところもあるが、日本はまだ木を切らなければならぬ。国産材で家を建てたり、薪を燃料に利用することで林業も活性化」とし、薪や炭の利用も訴えた。

丹波市在住の木材コーディネーター、能口秀一

さんとの対談も行われた。これからの森林を考えた時、建築用資材やクラフト用材を生み出したり、炭、薪、さらには山菜、キノコ栽培など、さまざまな用途が備わった山に再生することの大切さを語り合った。

植物の自立促す

「自然栽培」学ぶ

春日でセミナー

肥料を与えずに農作物を育てる「自然栽培」に関するセミナーが23日、老人福祉センター三尾荘で行われた。写真、NPO法人コミュニティ・サポートセンター神戸主催。東京で自然農法で育てた野菜などを扱う店を展開

各地でセミナーなども開いている河名秀郎さんを講師に迎えた。

河名さんは、自然農法を「過保護」な一般的な栽培と、何もしない「放任」の中間的なもの。植物の自立を促した、植物と人とのコラボレーションだ」と説明。「土を掘って検査し、自然な生命活動を阻害するものを除けば、肥料がなくても植物は育つ」とした。

「自然農法では最初に根をしっかりと



適正配

春日で

学校の適正配置議論が進むなか、丹波市教育委員会が21日、春日文化ホール(春日町黒井)で「学びの場」を今、学校・家庭・地域が創出したが考えを聞き、と題したフォーラムを開いた。写真、兵庫教育大学の加治修也学長をディネーターに3人のネリストを迎え、小

防犯

オカダ電工

はろうとする。人の中が見られないから、もたなく感じるが、んばれ」と言っている。見えてやれば、うして育った野菜は、しているから、台風